

課題管理実施報告書

報告日：09年10月26日

プログラム	アジア科学技術の戦略的推進:アジア科学技術コミュニティ形成戦略
課題名	第13回東アジア工学アカデミー円卓会議及び併催シンポジウム
実施日	2009年9月24日(木)～25日(金)
場所	名古屋国際会議場 (名古屋市金山)
形式	一般公開・シンポジウム・セミナー・講演会・ワークショップ・その他(会議) 展示物: 有(機器・設備 パネル ビデオ上映 体験型 その他()) 無
対象者	会員、一般、学生(大学・大学院)、その他(海外工学アカデミーメンバー等)
来場者	人数: 86名、(内訳: 会員21名、一般33名、学生16名、海外16名)
周知方法	新聞 雑誌 学会誌 メディア取材 プレリリース HP, メール発信 その他(チラシ)
実施者	社団法人日本工学アカデミー (共同主催: 中国工程院、韓国工学翰林院、共催: 日本学術振興会、後援・協賛: 多数)
内容	<p>9月24日: 公開シンポジウム「低炭素社会におけるトランスポーターション」において、日中韓3国の技術者が、技術、人間的ファクター、社会システムの3つの観点から発表と意見交換を行った。</p> <p>9月25日: 3国工学アカデミーの指定メンバー+タイのオブザーバー合計23名による「円卓会議」を開催した。各工学アカデミーの現状紹介、今後の協力体制などについて議論し、また前日のシンポジウムの成果を3国工学アカデミー共同声明として、日中韓3国の政府、産業界、学界等に向けて発信するとともに、国際工学アカデミー連合のネットワークを通じて世界に発信することを決定した。</p>
効果、問題点、今後の展望と課題	<p>シンポジウムにおいては、それぞれの国を代表する専門家の中で、交通手段の低炭素化に関する最新の技術開発動向を初め、幅広い知識や思想の相互理解が深まり、問題の重要性・協力の必要性が認識された。またそれに基づき日中韓工学アカデミーの共同声明を世界に発信し、国際的な協調体制による低炭素化の推進を呼びかけることにしたことの意義は大きい。</p> <p>円卓会議においては、今後も継続して日中韓工学アカデミー間の連携を保ち、時宜を得たテーマでシンポジウムその他の活動を継続することが確認された。また3国以外の近隣諸国についても、オブザーバー参加を勧め、その活動を支援していくことが再確認された。</p> <p>世界的な不況の影響により、産業界から資金支援が得られず、財政上厳しい制約を受けた。またやはり不況のせいもあって参加者が当初想定したレベルに達しなかった。しかし反面、参加者は特に関心の高い人に絞られたため、活発な議論をすることができた。またこの種のシンポジウムにしては学生参加者も少なからずいて、若手育成の場としても相応の寄与ができたといえる。</p> <p>円高による影響もあって、当初予定していたオーストラリア、シンガポール、ベトナム等の参加は得られなかったが、はじめてタイが参加し、コミュニティ作りに新しい局面を拓くことができた。</p> <p>日中韓工学アカデミー間の連携をさらに深化させるとともに、東南アジア諸国、インドなどにコミュニティを拡大することも検討している。これらの国々における工学アカデミー組織の新設・育成に力を貸し、将来国際アカデミー連合の一員となることのできるよう支援する。</p>
反省事項	シルバークロウ明けに開催日を設定したことは、準備の面でも参加者動員の面でもやや不利に働いた。また同時期にITS関連世界会議がストックホルムで開催されたため、ITS関連の研究者の参加が減った。地元企業との密接な連携のもとで開催する当初の構想が、自動車産業の世界的不況によりかなり後退した形になった。
特記事項	愛知県、名古屋市等の協力を得、地域社会との関係を深めることができた。またそれにより日本工学アカデミーの中部地区における知名度を向上させることができた。